

嵯峨本『史記』など古活字版諸種について

京都大学附属図書館訪書の記

神戸女子大学 助教授 仲井 徳

昨秋の一日、京都大学を訪問し、貴重な蔵書を拝見させていただいた。

写本の重文のかずかずの横顔を拝見して、眼福これに勝るものなく、至福の一日でした。刊本では、整版の高野版の粘葉装、奈良絵本、漢籍の種々と活字版では、古活字版及び近世木活字版に至るまで拝見させていただきました。

〔写本〕

重文

拾芥抄 3冊 袋綴装(5針眼訂) 舟橋蔵書
長根歌併琵琶行秘抄 1冊 袋綴(5針眼訂) 舟橋蔵書
周禮正義 15冊 袋綴装(4針眼訂) 兵範記 25巻
長承元年(1132)年~承安元年(1171)

〔版本〕

高野版

往生礼讃 1冊 粘葉装(糸綴じ補修) 建長3年(1251)7月刊
梵字悉曇字母並釈義 1冊 粘葉装 正平7年(1352)2月25日刊
上新請来経等目録 1冊 袋綴装 建治3年(1277)刊

<古活字版は別記>

奈良絵本 弁慶物語 1冊
妓王 2冊
阿国 1冊

整版 年代略記 1冊 袋綴装 横本 慶長期刊力
莊子 10冊 袋綴装 萬治2(1659)年刊 陽明文庫蔵印

近世木活字本 聖武記附録 4冊 袋綴装

中で、とりわけ興味を惹かれました古活字版について駄文を弄してみようと思います。

周知のとおり、古活字版は江戸時代初期、1590年頃から50年ほどの間に突如として興った、主として木の活字による印刷出版物です。それまでの整版による印刷から活字を使用した印刷技術は、イエズス会が布教に使ったキリシタン版(印刷技法はグーテンベルクの鉛鑄造に

よる活字印刷術から来ています)の影響が強いと言われていますが、大ぶりで雄渾な書体・大版でどっしりした造本から古来より古活字版として珍重されてきました。主として木彫の活字により約400点が刊行されています。

私が所属する「書誌学研究会」(私立大学図書館協会阪神地区)では、古活字版の活字印刷技法を解明しようとしてきました。鑄造の活字ですと1つの字母からいくつも同一の活字が作れるのですが、木彫の活字は文字通り1コマずつ手で彫るので、どこかで差異が生じて同一の活字は作れません。そこが木活字調査の面白いところです。印刷された版面から1コマづつの活字の形態と種類について住所録を作成します。各々の活字の使用頻度を調べることで、その印刷工程までを解明できるのです。これまでに、勅版の漢詩集『錦繡段』と嵯峨本の謡本『浮舟』について活字調査を終えました。

現在は、古活字版のうち『浮舟』以外の「嵯峨本」の活字調査を進めているところですが、図らずも、今回嵯峨本『史記』を拝見することができました。

『史記』が角倉素庵(1571 - 1632)によって慶長4年(1599)に開版されたこと、「嵯峨本」と総称される一群の出版物の最初のものであることは、最近の研究成果により確認されています。

「嵯峨本」は京都洛北の鷹が峰の工房において出版された、『伊勢物語』や『観世流謡本』等、現在全部で17点出版されたと言われていいます。「嵯峨本」の特色は 木彫の活字それも変体仮名による連続活字も使用 料紙に雲母(きらら)模様による下地が施されている 絵入り本がある 優雅な綴葉装(てっちょうそう)の糸綴じ造本がある わが国の文学作

品を初めて印刷・出版した。さらには底本・校訂がよく、それ以降の定本になった等で、世界で最も美しい本のひとつです。

「嵯峨本」の出版につきましては、これまでは本阿弥光悦（1558 - 1637）が中心となって出版し、角倉素庵が手伝ったとされていたのが、ここにきて素庵中心説が有力になりました。

嵯峨本は近年各方面から注目を浴びて、次の各分野からたくさんの論考が出版され総合的に研究されてきていまして、たいへん喜ばしいことです。

ア	国文学	本文批判による年代推定
イ	美術史	俵屋宗達の係わり
ウ	筆跡	光悦流（風）・角倉素庵流
エ	装訂	綴葉装の特色
オ	料紙	紙師宗二の印章
カ	雲母（きらら）模様	京都「唐長」の襖製法
キ	絵入り	奈良絵本の関係 等



さて、古活字版について、嵯峨本『史記』の書誌事項を記します。

130巻50冊 袋綴装（とじ穴は5針眼訂・大本）
刊記ナシ ただし、慶長4（1599）年に角倉素庵が開版・刊行したことは文献（林羅山の『羅山先生集』）から分かっています。雷文牡丹模様を空押しした大ぶりの丹表紙（原装、原題簽 32.4cm × 21.3cm）四周双边 無界 半丁8行、行17字 活字は漢字のみで大字と小字がある。旧蔵者谷村太一郎氏の「秋邨遺愛」の朱印記あり。箱入り 箱書に「嵯峨本史記」と墨

書あり。

漢籍ですが、「嵯峨本」の成立を考察するのに重要な出版物です。



さらには、天皇が出版なされた「勅版」のうち、後陽成天皇による慶長勅版『日本書紀神代巻』 2巻1冊 袋綴装（4針眼訂・大本）渋皮表紙（原装、原題簽、29.2cm × 20.5cm）四周单边 無界 半丁8行、行17字 漢字で大・小字あり。大きな力強い字体である。慶長4年（1599）刊（刊記は「日本書紀慶長己亥季春新刊」と大きく特色があります旧蔵者鈴鹿三七氏の「鈴鹿氏」の朱印記あり）も拝見することができました。国書出版の嚆矢です。

徳川家康も出版事業には熱心でした。慶長5年に『貞観政要』を出版しましたのを伏見版と呼びますが、その翻刻古活字版『貞観政要』10巻10冊 袋綴装 元和元年（1623）刊、また家康が隠居した駿府で銅鑄造活字により出版し



た駿河版『大蔵一覽集』 10冊 袋綴装（4針

眼訂・大本) 茶色表紙(原装30.3cm×20.1cm、書き題簽) 四周双辺 有界 半丁8行、行17字 漢字で大・小字あり。慶長20(1615)年刊(同年の元和元年の識語あり)等を拝見することができました。

少し詳しくメモを取りました3点を見ていて、漢文のものばかりですが、出版者がそれぞれ異なりますのに版式が似通っていることに驚かされます。

以上の優品の数々はもとより管見によります

もので、九牛の一毛、正確を期したとは言えませんので、ぜひ原物にて調査されますようお願いいたします。

最後に、吉田松陰ゆかりの尊攘堂史料一式を、山県有朋が明治4(1871)に認めた扁額『尊攘堂』ともども拝見でき感激いたしました。京都大学附属図書館の皆さまにはたいへんお世話になりました。厚くお礼申し上げます。以上
(なかい いさお)

附属図書館所蔵『幼学指南抄』が重要文化財に指定されました。

情報サービス課 雑誌・特殊資料掛

平成14年3月22日、当館所蔵「『幼学指南抄』第七、第二十二中」が国の重要文化財に指定されました。

『幼学指南抄』は平安時代末期に編纂された類書で、ほとんど原本に近いと思われる古写本が唯一部のみ現存する貴重な典籍です。当時の代表的な漢籍類、『禮記』や『論語』などを天部・歳時部・人部・火部などの事項のもとに編纂した漢籍の一大分類文集で、文中の引用書には、今日佚書となっている『晋令』『廣州記』などの逸文も伝えられています。全体は目録一巻、本文三十巻の計三十一帖からなるものでしたが、現存は本文二十三帖のみとなっています。本書の書名は、唐代の徐堅等撰による類書『初学記』に模して、「初学」を「幼学」となし、抄出して「抄」として編纂せられたところにあるとされています。

本館所蔵の『幼学指南抄』第七巻の内容には

「人部一・二」が、同第二十二巻の内容には「巧藝部下、方術部、火部下」が当てられています。二帖の各巻末には他巻とおなじく「覺瑜」の名がみられ、さらに第二十二巻の元表紙には、原姿が三十一巻からなっていたことがわかる「卅一冊之内」との墨書がみられます。体裁は粘葉装となっています。

